

(世界保健機関 (WHO) 提唱、世界心臓連合 (WHF) 共催)

非感染性疾患 (NCDs) シンポジウム 2013

日時：平成24年9月7日 (土)

会場：京都大学芝蘭会館 稲盛ホール

特別講演	14 : 05	—	14 : 50
シンポジウム			
「NCDsの予防、治療」	15 : 00	—	16 : 50
パネルディスカッション	16 : 50	—	17 : 20

主催：NPO法人アジア太平洋心臓病学会

共催：世界心臓連合、アジア太平洋心臓病学会、ワールド・ハート・デー連絡協議会

特別講演	堀 正二氏 (大阪府立成人病センター総長) <心臓血管病とがんの接点>
<p>非感染性疾患 (NCDs) としての循環器疾患と悪性新生物 (がん) は、これまで共通の土俵で論じられることは少なかったが、両疾患は幾つかの共通点を有している。まず、両疾患は高齢者に多く先進国における 2 大原因となっている。循環器疾患は、主として血管の動脈硬化性変化と血栓塞栓による主要臓器の虚血性変化が主な病態であり、症状は臓器特異性が高いが、その病態の多くは全身性の血管病変に基づく。一方、悪性新生物 (がんや肉腫、血液がん) の多くは、老化やウィルス感染に伴う遺伝子異常がその発症契機になっており、原発巣はその臓器の機能異常を発現されるが、転移すると多くは多発性で全身性臓器障害を惹起して死に至る。</p> <p>以下の観点から、両疾患の接点について考察する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 疾患の予防：両疾患の予防には、禁煙・食事・運動など共通点が多い。 2) がんと血栓症：担がん患者は、静脈血栓塞栓症や肺塞栓などの血管病を生じやすい。 3) 抗がん剤治療と心毒性：分子標的薬など抗がん剤の投与により心筋障害 (心毒性) を生じる。 	

座長のことば	松森 昭 (NPO 法人アジア太平洋心臓病学会理事長、世界心臓連合科学・政策構想委員会委員、アジア太平洋心臓病学会前理事長、同科学諮問委員会委員長) <NCDs とは？>
<p>脳卒中や心筋梗塞などの心臓血管病、がん、ぜんそくや肺気腫などの肺疾患、そして糖尿病の4つの疾患を総称してNCDs (Non-Communicable Diseases、非感染性疾患) と呼びます。2010年の大規模な調査では、全世界の5280万人の死亡のうち、二大死因は、動脈硬化による虚血性心疾患13%、脳卒中11%であり、最近の20年間で両疾患による死亡は全死亡の20%から25%に増加し、NCDs は、全世界の死亡の原因の60%を占めています。</p> <p>2012年の日本では、心臓病は18万9千人 (15.5%)、脳卒中は12万3千人 (9.9%) と死亡の2位、4位を占め、心臓血管病とがンを合わせると全死亡の54%を占めています。</p> <p>NCDs は共通のリスクファクターを持ち、運動不足、喫煙、肥満、高脂血症、高血圧、糖尿病などの心臓血管病のリスクファクターは、がんや認知症とも関連することが知られています。運動、禁煙、健康な食事によりこれらのリスクファクターを減らすことが、がんや認知症の予防にもつながると考えられます。健康な食事として、カロリーだけではなく減塩が重要です。</p> <p>本シンポジウムでは、NCDs の予防、治療に関して各専門の分野の方々にご講演を戴き、皆様のNCDs のご理解を深め、NCDs の予防にお役に立つシンポジウムにしたいと考えています。</p>	

座長のことば	宮崎 俊一氏 (近畿大学循環器内科教授) <糖尿病と心臓血管>
--------	------------------------------------

講演 1	三浦 克之氏 (滋賀医科大学公衆衛生学教授) <日本人はもっと減塩すべきか? -心臓血管病予防のために->
------	--

講演 2

島田 俊夫氏（静岡県立総合病院 臨床医学研究センター部長、NPO-APSC 理事）
＜NCDs の予防、早期発見と住民健康診断 ―心臓血管病を中心に―＞

Noncommunicable diseases (NCDs)は先進国においてはやっかいな現代病となっている。交通手段の発達により歩行による移動が減り、食物供給過剰による飽食生活、特に外食産業の普及によるファストフードの利用による摂取カロリー過剰のため NCDs が蔓延している。住民健康診断受診者の中で、循環器バイオマーカーの測定に同意した約 2,000 人の住民を対象に行った NCDs の現況と新しいバイオマーカーによる未病発見の試みについて報告する。対象地域は高齢化が進み、女性が約 6.5 割、男性が約 3.5 割の集団で平均年齢は 67 歳であった。心不全マーカーBNP, NT-proBNP を健診受診者を対象に測定した。BNP は 20pg/ml, NT-proBNP は 55pg/ml 以上を異常として評価した。受診者全体では約 5 割強で異常値を認め、加齢により明らかに異常者の占める割合が増加した。しかし、80 歳を超えても 15%程度の方は正常のレベルを維持しており、健康に年をとれば心血管系の負荷は最小限にとどめておける可能性が示された。その他、メタボ症候群、腎機能についても新しいバイオマーカーの測定結果を含めて報告する。

講演 3

長谷川 浩二氏（国立病院機構京都医療センター展開医療研究部長、NPO-APSC 監事）
＜煙のない健康な社会をめざして ―NCDs 撲滅のために―＞

WHO（世界保健機構）は「喫煙は予防できる最大の疾病原因」としています。タバコは癌、心筋梗塞や脳卒中、慢性閉塞性肺疾患（COPD の原因であることはよく知られています。以外に知られていないのが、喫煙が糖尿病そのものの発病につながることです。タバコによる健康被害は、今や吸っていない人にとっても重要な関心事です。街ぐるみで禁煙するとその街全体の（すなわちタバコを吸っている人も吸っていない人も含めて）心筋梗塞による入院が半分になったと報告されました（British Medical Journal 2004年328巻977-980頁）。ここまで有害なタバコ、何故止められないのでしょうか。それはタバコの成分であるニコチンを体が必要とする状態になってしまっているからです。禁煙に際して起こるニコチン切れの症状をやわらげよう、というのがニコチンパッチによるニコチン代替療法や、飲み薬による禁煙治療です。NCDs の主要な原因であるタバコ、たばこを吸っている方は是非禁煙を、吸っていない方も受動喫煙による健康被害を知っていただき、NCDs 撲滅のために、みんなで煙のない健康な社会を目指しましょう。

講演 4

仲 建彦氏（武田薬品工業・コーポレートオフィサー、創薬化学研究所長）
＜くすりを創る：2万分の1への挑戦 ―ARB 研究開発を中心に―＞

アスピリンが開発されて以来、近代医薬品の歴史は1世紀が過ぎた。1960年代に入り、それまでの伝承薬や天然素材をオリジンとした「くすりを創る（創薬）」は、メカニズム指向型研究へパラダイムシフトし、多くの新薬を生み出し、生活習慣病はじめ多くの疾病の治療・予防に貢献してきた。1990年代の遺伝子・蛋白質工学、コンビケムやHTSなどの先端創薬技術の導入と優れたバイオ医薬品の開発により、21世紀には輝かしい「ゲノム創薬」の到来を誰もが期待した。しかし、現在「創薬」が年々困難となり、一つの新薬を創るのに10数年の期間と千数百億円のR&D費用が必要で、その成功率は数万分の1と言われている。演者は、アンジオテンシンII受容体拮抗薬（ARB）の研究開発に携わって約30年、世界最初のリード化合物の発見から降圧薬のカンデサルタン、次いでアジルサルタンの創製に成功した。本講演では、ARBの研究開発を通じて益々困難になる「創薬」についてお話ししたい。

協賛企業

田辺三菱製薬株式会社、シスメックス株式会社、ファイザー株式会社、
川喜金物株式会社、グラクソ・スミスクライン株式会社、
ロシュ・ダイアグノスティックス株式会社、旭化成株式会社ほか